

安全性能を第一に考える  
ヘルメット界の先駆者であり続ける。



気象条件やサイズ等で帽体の厚さに影響するため、職人ひとりひとりが仕上がりを光にかざしてバランスを常に微調整する。

日本の乗車用ヘルメットの歴史の始まりは、アライヘルメット創始者の新井廣武氏によって時代が開かれる。

新井廣武氏は、根っからのバイク好きだった。休みになれば長距離ツーリングに自ら出かけて行った。そんな廣武氏は、乗車用ヘルメットが日本に存在しなかった時代に自らが好きなバイクに乗るときに、自らの頭を護りたいとヘルメットの構想を練った。

最初は、ベークライト樹脂（人類が初めて造った合成樹脂）を染み込ませた帆布を加熱加圧して成形する帽体成形技術を開発しヘルメットを製造。その後、すぐにガラス繊維をプラスチックに入れた複合材料のFRPを思いつく。当時は日本には出回っていなかったが、新聞で読んでひらめき、FRPについて勉強したそうだ。「ガラス繊維じゃなくてもプラスチックの方がポリバケツのように大量に造れて良いのではないか」というような誘いもあったという。しかし、プラスチックというのは、出来上がりは同じように仕上がりが見えるが、叩くと簡単に割れてしまうものもある。さらに、生産時に割れる物と、割れない物との区別がつかない。その点、FRPの場合は決まった通りにやれば、どれも同じ強さができる。安全を第一に考えたときにFRPという選択は必然だった。

廣武氏はさらに発泡スチロールの耐衝撃特性に着目。それまでのハンモック、コルクに替わる衝撃吸収体、発泡スチロール製の緩衝体を開発した。廣武氏が導入した、近代における乗車用ヘルメットの基本設計となっていたFRP帽体と発泡スチロール製ライナの組み合わせは、廣武氏が世界で最初に造り、それは日本のヘルメットの歴史となった。



## アライは、ヘルメット界のパイオニア

何もないゼロから作り上げ、価値のあるものにする『モノをつくる喜び』。創業以来、その企業文化が根付いています。